

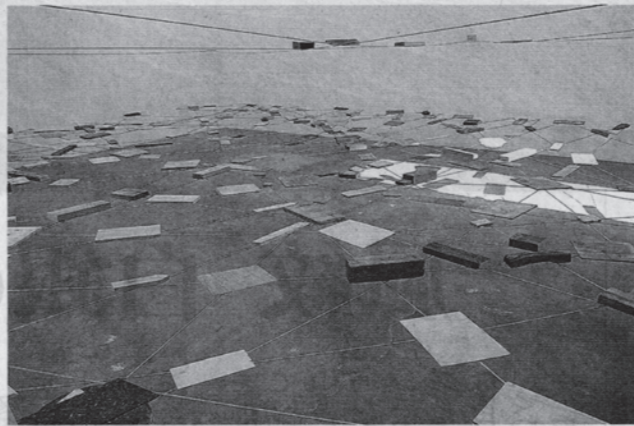
文化

チーフキュレーターは、ヴァーチャルな現代社会で身体的な

ヴァンシ彫刻庭園美術館(静岡県長泉町)の展示室に入ると、窓に風景をさえぎるように角材が斜めにはめこまれていた。一九四四年岩手県生まれの菅木志雄は、あるがままのもの、あるいはあっても見えない、人があえて見ないものの存在から輝く輪郭を引き出す。菅にとつて人とは同等だ。何げなく見えても深い思念と洞察を重ねた彼のミニマルな作風は、ルネサンスから続く人間中心の芸術史への批評とも言える。六八年から七〇年代前半、菅は「もの派」という東洋的な世界観にも通じる芸術運動を担った。パリのポンピドゥー・センターで八六年に開催された「前衛芸術の日本展」で大きく取り上げられ、近代を再考するポストモダンの潮流とも言われた。近年、国際的にも高い評価を受けている。今、東京都現代美術館でも菅の個展「置かれた潜在性」が行われており、長谷川祐子

美術評

菅木志雄個展



菅木志雄《捨置状況》1972/2013年 東京都現代美術館 Collection: GLENSTONE—佐藤毅撮影

存在から輪郭引き出す

実感を伴うものの世界との接触の欲求が、こうした評価の背景にあると指摘する。自然に恵まれたヴァンシの個展では、庭の小山にアクリルと石の新作があり、室内ではかつてヴェネチア・ビエンナーレに出品した杉の木を

も再制作されたが、今回はより素材の透明度が増し、シャープでスマートな印象を受ける。この作品は現在、ピノー・コレクション蔵。東京都現代美術館の出品作の多くが、欧米やアラブの有数の美術館や個人所蔵に帰すが、重い石やコンクリート

を輸送して再構築されたのではない。空間に合わせて菅が作り上げた新ヴァージョン。だが所有者のある作品は本展終了後に破棄される。ヴァンシのオープニングで久しぶりに菅のアクティヴェイション(公開制作)を見た。紙、針金、石、ペンキなどを用いて床面で構成・移動するイヴェントだ。初期から菅はつねに実践しており、東京都現代美術館では多数の記録映像も公開している。こうした行為と同様に、作品の一過性、仮設性を重んじる菅だが、後世たとえ指示書があっても、緊張感のあるインスタレーションを他者

の手で再現できるのだろうか。しかも七〇年代の代表作が国外にかなり流出した現状を鑑みると、二つの美術館でくしくも同時期に開催されている大規模な個展は、ある悔しさを交えつつ、必見と言わねばならない。(岡部あおみ=美術評論家)

六九年作の白いワックス(蠟)の『並列層』は、筆者が企画にかかわった先のパリの前衛展でも再制作されたが、今回はより素材の透明度が増し、シャープでスマートな印象を受ける。この作品は現在、ピノー・コレクション蔵。東京都現代美術館の出品作の多くが、欧米やアラブの有数の美術館や個人所蔵に帰すが、重い石やコンクリートを輸送して再構築されたのではない。空間に合わせて菅が作り上げた新ヴァージョン。だが所有者のある作品は本展終了後に破棄される。ヴァンシのオープニングで久しぶりに菅のアクティヴェイション(公開制作)を見た。紙、針金、石、ペンキなどを用いて床面で構成・移動するイヴェントだ。初期から菅はつねに実践しており、東京都現代美術館では多数の記録映像も公開している。こうした行為と同様に、作品の一過性、仮設性を重んじる菅だが、後世たとえ指示書があっても、緊張感のあるインスタレーションを他者

\*ヴァンシ彫刻庭園美術館(静岡県長泉町東野クレマチスの丘347の1)では3月24日まで。水曜休館。東京都現代美術館(江東区三好4の1の1)は3月22日まで。月曜休館。3月7日午後2時から作家によるアクティヴェイション。

国	作家	執筆者	文献タイトル	媒体名	発行日	頁	発行元	展覧会名
J	菅木志雄	岡部あおみ	菅木志雄展 存在から輪郭引き出す	東京新聞 夕刊	2015年2月20日	7面	東京新聞社	